

「お話の真実性」を感じ取る-ティム・オブライエン
の『本当の戦争の話をしてしよう』 -

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2013-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 寺澤, 由紀子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/13952

「お話の真実性」を感じ取る

—ティム・オブライエンの『本当の戦争の話をしてよう』—

寺 澤 由 紀 子

『本当の戦争の話をしてよう』（原題：The Things They Carried. 一九九〇年）——これは言うまでもなく戦争の話である。一つ一つのチャプターを独立した短編として読むことができるこの書には、ベトナム戦争に歩兵として従軍し、帰還後戦争の話を語り続けている作家ティム・オブライエン（Tim O'Brien）と、彼が属していたアルファ中隊の兵士たちのストーリーが、戦地での視点と戦後二十五年近くたった「現在」の視点を交えて語られている。例えば、ベトナム戦争への徴兵通知を受け取り、大義はなく間違ったものだと思っている戦争に加担することに抵抗しながらも、ぎりぎりのところで徴兵忌

避できなかった若者の葛藤。恋する女性を夢想し続けていたばかりに、戦地での安全確保がおろそかになり、部下を死なせてしまった部隊長の苦悶。初めて殺してしまつたベトナム兵の遺体を前に、身動きもできず、ただ無言で見つめ続ける兵士の姿。目の前で泥流に飲まれていく仲間を助けることができず、その罪の意識にさいなまれてながらも、それを誰にも語るできないままやがて自殺を遂げてしまう帰還兵。このような、兵士たちひとりひとりが背負う重圧と痛みがこの書には綴られている。そして、我々読者は、そうしたストーリーを、オブライエンやその仲間の兵士たちが実際に体験したものだとい

う意識を持ってこの書を読み進めることになる。

しかし、それは本当に実際の体験談なのか——やがてそんな疑問が我々を襲うようになる。仲間を救えなかったことに苦しみ続ける兵士についてのストーリー直後に置かれたチャプターで、オプライエンは衝撃的な告白をするのだ。仲間の死に対する責めを負うべきはその兵士ではなく、自分自身であると。一体何が本当の話なのだろうか、もしオプライエンに責任があるとすれば、それを別の兵士の抱える記憶として書き換えた意図はどこにあるのだろうか——そうした読者の戸惑いにさらに追い討ちをかけるように、オプライエンはこの書の終盤近くでこのようなことを言う。「私は（略）四十三歳で、今では作家である。そして遙か昔、私はひとりの歩兵としてクアンガイ省を歩き抜いた。それだけを別にすればここに書いてあることのほとんど全部は創作である」（一九一）。実際、この書は回顧録という形を取ったフィクションなのである。実存の元兵士であり作家のティム・オプライエンが、自分の経歴や体験を注ぎ込んで、元兵士・作家の「ティム・オプライエン」という架空のキャラクターを創り出し、その架空の「オプライエン」と仲間たちの戦争体験や戦後なお抱え続ける思い、そして作

家としてそれらを書くということについて語らせる、という手法をとっているのだ。しかし、なぜオプライエンはこのような手の込んだことをしたのだろうか。フィクションならフィクションとして提示すればよいものを、なぜ、あえてフィクションとノンフィクションの境界をぼかし、しかも、前述の、仲間を救うことができなかった兵士のストーリーのように、一つの出来事を全く異なったバージョンで書き換えるといったことをしているのだろうか。

その答えを模索する上で、まず考えなければならぬのは、フィクションとノンフィクションの違いは何かという問題である。フィクションは虚構でノンフィクションは事実、そしてその二つは対極にある、そういう認識が我々の中にはあるのではないか。しかし、果たして本当にそうなのだろうか。フィクションとノンフィクションの間に境界はあるのだろうか。オプライエンは言う。「どんな戦争の話をするときでもそうだが、とくに本当の戦争の話をするとき、そこで実際に起こったことと、そこで起こったように見えることを区別するのはむずかしい」（二二〇）。というのも、「戦争において君は明確に物事を捉えるという感覚を、失っていく。そしてそれ

につれて何が真実かという感覚そのものが失われていく」(二三五)からであり、故に「本当の戦争の話の中には絶対的真実というものはまず存在しない」(一三五)のだと彼は言い切る。ここでオプライエンが述べていることは、戦争の話に限定されているが、実際は、他のどんな話でも絶対的真実というものはまず存在せず、事実と虚構の境界は明確ではない、あるいは、ないと言ってしまうてよいだろう。というのも、記憶とは、何かを経験するたび自動的に自分に備わるものではなく、何かを想起する際そこで作られるため、過去の出来事をそっくりそのまま思い出すことは不可能であり、いつ、どのような状況でそれを想起するかによっても記憶は微妙に異なってくるからだ。つまり、無意識的にも意識的にも記憶は操作されうるもので、時が一旦過ぎ去ってしまえば、そこで起こったことは二度とそのままの形で再現されることはない。その場面をカメラが捉えて、それをあとで人が見たとしても、そこで実際にそれを見聞きした感覚は味わうことはできない。だから、それが実際に起こったことであっても、それを語る時点で、それはすでにフィクションなのだ。そして、それが戦争という特殊な場面の場合、事実と虚構はより複雑に入り組んだものになる。

というのも、戦場では二つのレベルにおいて真実性というものが不明瞭になっているからである。まず、実際に戦争を体験している段階において、人は「明確に物事を捉えるという感覚を、失っていく」ような極限状況にあり、「何が真実かという感覚そのものが失われていく」。そしてさらに、そこで起こったことを想起するというレベルにおいても、事実と虚構が混ざり合っていくことになる。特に、戦争のように、見たくないものを見、思い出さたくないものを経験した時、人は自分が壊れるのを防ぐために記憶を無意識的に操作する。だから、そこには絶対的な真実はまず存在しないのだ。

しかし、ここで重要なのは「絶対的真実」は存在しなくとも、物語の中に存在する「真実性」を我々が感じ取らなければならないということである。オプライエンは言う。「私は君に私の感じたことを感じてほしいのだ。わたしは君に知ってほしいのだ。お話の真実性は実際に起こったことと真実性より、もっと真実である場合があるということ」(二九二)。実際に起こったことは二度とそのままの形で再現できないにしても、その意味で「絶対的真実」から外れているとしても、その出来事に関わった人物が、それが起こった時点で、あるいはあと

になって「経験した」、「感じた」と思うことは真実なのである。また、その人物が「経験したかもしれない」、「感じたかもしれない」と第三者が慮る中にも真実性があるのだ。お話は、「実際に起こったことの真実性」が示すことのない、そうした「真実」をも我々に提示してくれる。

オプライエンが、わざわざ自分と同じ名前の語り手を設定し、自分自身のバックグラウンドを投入してキャラクター設定をしたのは、事実と虚構を組み合わせ、わざとその境界を不明瞭にすることで、この事実と虚構、ノンフィクションとフィクションという、一見バイナリーとして捉えられがちな二つのものが、決して対極にあるのではなく、むしろその境界は流動的であり、複雑に入り組み、重なり合っているということを我々に示そうとしているからだ。そして「実際に起こったことの真実性(happening-truth)」「それが真実であると思いがちな我々に、そうではないことを思い起こさせ」、「お話の真実性(story-truth)」を改めて感じるよう訴えかける。だからこそ、オプライエンは、幾つものバージョンのストーリーを読者に与え、それぞれの状況にある真実性を読者に読みとらせようとしている。いつ、どこで何が起こっ

たかというデータのなものとらわれるのではなく、また、フィクションの中の「起こっていないもの」について考え、深く追求しても意味がない、と思うのではなく、そこで語られる「起こったかもしれないこと」がなぜ「起こったかもしれない」のかを考え、それに関わった人物の心情を想像し、受け止め、共感していくこと、それが必要なだとオプライエンは語りかけている。

この書には様々な「本当の戦争の話」が描かれている。これを読んであなたはどのような真実性を感じ取るだろうか。そして何を思うだろうか。戦争の話に限らず、世の中に起こっていることすべてについて、我々は想像力と共感力をもって「お話の真実性」を感じ取ろうと努めなければならない。そうすることで初めて、事実だけに捉われていては見えないものが見えてくるのだ。

《注》

文中の引用は、村上春樹による *The Things They Carried* の翻訳『本当の戦争の話をしよう』（文春文庫、一九九八年）を使用している。